

## 柔道の国際化と日本柔道の今後の課題 (第五報)

—近代オリンピックと柔道競技を中心に—

野瀬 清喜\*・野瀬 英豪\*\*・鈴木 若葉\*\*\*・三宅 仁\*\*\*\*

キーワード：国際柔道、嘉納治五郎、近代オリンピック、メディア

### 1 緒 言

「ひとつの世界、ひとつの夢」をスローガンに第29回オリンピック北京大会は、2008年8月8日、午後8時に開幕した。夏季五輪としては、東京、ソウルに続くアジア3都市目の開催で、史上最多となる204の国と地域から約1万6千人の選手、役員が参加し熱戦が展開されたことは周知の通りである。

今大会は政治色の強い大会でもあり開会式の巨大スタジアム（愛称・鳥の巣）には、ブッシュ米大統領、サルコジ仏大統領、福田首相など80人以上の各国政府首脳が出席し、厳戒態勢の中で開催された大会でもあった。

孔子の論語、「朋あり遠方より来る、また、楽しからずや」で始まった開会式は、中国56の民族から選ばれたという子どもたちの中国国旗の入場、9歳の少女の天使の歌声などで喝采を得たが、事実とは異なった演出であるという指摘により、開閉会式演出の総監督張芸謀氏が「口パク」であったことなどを記者会見で明らかにした。

また、開幕前、各国の選手やメディア、観客

から懸念の多かった、大気汚染、食品の安全、テロの問題などは、今大会に限れば大きな問題はなかったように見える。柔道選手団は、8月5日夕刻、北京に到着したがスモッグ状の曇り空が連日続き、近くのビルさえ霞んで見えるほどであった。しかし、開会式前や女子マラソンの前になると定期的に6、7時間も続く夕立のような降雨があり、我々は組織委員会が準備した雨合羽を着用し移動に苦勞させられた。翌日は必ず澄み切った空気と青空になった。市気象局は4月のマラソンテスト大会で人口雨を降らせたと述べている。このため大会期間中も人口雨を降らせていたのではないかとの見方が広がっている。

ともあれ、日本柔道は金4、銀1、銅2という成績で8月15日に競技を終え、16日に無事に帰国した。往路復路とも成田空港上空の雷雨のため2、3時間の遅れとなったが、帰国後の1週間はメディアを通じてのオリンピック観戦をし、8月24日の閉会式後は、パラリンピック中継のテレビ解説や強化委員会における北京大会の競技結果の分析等を担当してきた。

本研究では、近代オリンピックの歴史と問題点、柔道の創始者である嘉納治五郎とオリンピック運動、北京オリンピック柔道競技とパラリンピック柔道競技を取り上げ、柔道の国際化と日本柔道の今後の課題を探る。さらにこれらの

\* 埼玉大学教育学部保健体育講座

\*\* 淑徳大学国際コミュニケーション学部

\*\*\* 大乗淑徳学園本部

\*\*\*\* 平成国際大学スポーツ科学研究所

知見からロンドン五輪の強化方針と強化策を明確にしたい。

## 2 近代オリンピックの歴史と問題点

### (1) 古代オリンピック

ギリシャ南部、ペロポネソス半島の西側、エリス地方を西に流れるアルフェイオス川と北から注ぐ支流クラディオス川に囲まれた谷間にオリンピアの地がある。この地に紀元前776年から393年までの約1200年ちかい年月に293回開催されたと伝えられるのが古代オリンピックである。4年に1度の開催は太陰暦によるといわれている。

古代オリンピックの中止はローマ帝国の支配によりキリスト教を国教と定められたためといわれ、異教であるゼウス神を祭る祭典は禁止された。その後、民族の大移動とアルフェイオス川の2度の氾濫や地震によって古代オリンピックの施設は地下に埋まり1000年近い眠りについていた。

オリンピアの遺跡はドイツの考古学者E. クルティウスによって1875年から81年にかけて本格的に発掘された。これを機にバイエルン侯オットー一世が首都アテネで古代オリンピックの復活大会を行うことを考えついた。

### (2) 近代オリンピック歴代会長

国際オリンピック委員会歴代会長は、オリンピック運動の方向性に大きな影響力を持ち、それぞれの時代の国際紛争、民族紛争、人種差別、アマチュア問題などを処理し最終決断を下してきた。これらの人物のプロフィールと在任期間を知ることにより各時代のオリンピックの方向性と問題点を知ることができる。歴代会長の氏名、出身国、在任期間、主な活動歴は以下の通りである。

①初代 デメトリウス・ビケラス (ギリシャ)  
1894～1896年：クーベルタンは1900年パリで近代オリンピックを開催しようと考えたが、

ビケラスは第1回大会をアテネで開催すべきであると主張した。新設されたIOC憲章では、会長は次回開催国から選ばれるとあったため約2年間会長職を務めた。アテネ大会を成功させた後、ビケラスはIOCを退会した。

②2代 ピエール・ド・クーベルタン (フランス) 1896～1925年：「情操の完全な発育のためには健全な肉体が必要である」と述べ、国際オリンピック委員会 (以下IOCと略す) を設立し、近代オリンピックの開催を提唱し実現させた。五輪マークも男爵の発案である。オリンピックの開催に全財産をささげ晩年は赤貧の生活を送ったが、その行く末を案じ「自分の心臓をオリンピアの丘に埋めるように」と遺言した。

③アンリ・バイエ・ラツール (ベルギー) 1925～1942年：  
第一次世界大戦の傷跡がいえぬベルギーにオリンピックを誘致し、僅か1年の準備期間で成功に導いた。その手腕が買われクーベルタンの辞任後、逝去する1942年までIOCを率いた。しかし、在任後半のヘルシンキ大会は第二次大戦で中止となっている。

④ジークフリート・エドストローム (スウェーデン) 1946～1952年：  
ラツール会長時代に副会長を務めたエドストロームは、第5回ストックホルム大会で競技種目の徹底的な見直しを行った人物である。就任後のロンドン大会は中止となったが、これらの実務能力から第二次世界大戦後のオリンピック復興に尽力した。

⑤アベリー・ブランデー (アメリカ) 1952～1972年：  
近代五種のオリンピック代表であったブランデーは、いかなる形であれオリンピックにプロフェッショナルリズムが持ち込まれることに反対した。任期中の最も大きな事件はミュンヘン大会のテロ事件で、選手村にいたイスラエル選手が11名殺害されたことである。この時、ブランデーは大会継続の決断を下し

非難を浴びたが、大会後に会長を辞任にした。

⑥キラニン卿（アイルランド）1972年～1980年：キラニンの在任中、オリンピック運動は困難な時期であった。モントリオール大会の財政上の失敗、モスクワ大会のボイコット問題などの対応に追われた。また、モスクワ大会後の夏季大会、冬季大会とも1都市しか候補しないという事態に陥った。

⑦ファン・アントニオ・サマランチ（スペイン）1980～2001年：

長年、スペインオリンピックチームの代表役員であったサマランチは、スポンサーシップやテレビ放映権の管理に明るく、プロ化を容認する姿勢を貫いた。これによりオリンピックはさらに商業化、拡大化を進めることとなった。

⑧ジャック・ロゲ（ベルギー）2001年～現在：サマランチ路線の継承者であるロゲは、ベルギーの元ラグビー選手であり、腐敗と薬物投与に関して力を注いでいる。また、拡大化し続けるオリンピック参加人数を1万人程度に削減する施策を挙げている。このことより次のロンドン大会から野球とソフトボールが除外されることになったのは記憶に新しい。

### （3）オリンピックの歴史と問題点

次に近代オリンピック開催の歴史と各大会における問題点を挙げた。

第1回 アテネ（ギリシャ）1896年：参加国は欧州中心で男子のみ。女子が1名参加したとの記述もあるが、女人禁制の大会であった。最終日のマラソンは開催国のスピリドン・ルイスが優勝し劇的な幕切れとなった。1位の選手に銀メダル、2位の選手に銅メダルが贈られたが、開催のための費用の捻出に苦慮したという記録も残っている。

第2回 パリ（フランス）1900年：パリ万博の一部として行われた。オリンピック運動の趣旨が十分理解されず会期は長期間に及んだ。女性の参加が認められテニス等が実施された。

第3回 セントルイス（アメリカ）1904年：この大会も万博の一部として開催され会期は5ヶ月に及んだ。アメリカ大陸初の開催であったが、欧州選手の参加は少なかった。

第4回 ロンドン（イギリス）1908年：前回までの大会は参加申し込みを個人やチームで行っていた。この大会からは各国のオリンピック委員会を通じて行われるようになった。

第5回 スtockホルム（スウェーデン）1912年：日本選手団が初参加。団長嘉納治五郎、選手三島弥彦、金栗四三が陸上競技に出場。五種競技と十種競技で優勝したジム・ソープが、野球のマイナーリーグで短期間プレーしていたことからメダルを剥奪される。

第6回 ベルリン（ドイツ）1916年：第一次世界大戦のため中止。

第7回 アントワープ（ベルギー）1920年：第一次世界大戦で被害の大きかったベルギーで開催。この大会から選手宣誓が始まる。日本からは18名の選手団が陸上、競泳、テニスに参加した。熊谷一弥、柏尾誠一郎がテニスで日本初となる2個の銀メダルを獲得した。

第8回 パリ（フランス）1924年：大会効率を高める各種の工夫がなされ、選手村の原型となるコテージが建設される。日本からは29名の選手団が陸上、競泳、テニス、レスリングに参加し、レスリングで内藤克俊が銅メダルを獲得した。

第9回 アムステルダム（オランダ）1928年：クーベルタンの反対で見送られてきた女性の陸上競技への参加が認められ、人見絹代が800mで銀メダルを獲得した。日本からは56名の選手団が陸上、競泳、飛込、レスリング、漕艇、ボクシング、馬術に参加し、織田幹雄と鶴田義行が悲願の金メダルを獲得した。また、この大会からスポンサー制度が採られコカコーラが公式スポンサーとなった。

第10回 ロサンゼルス（アメリカ）1932年：ヨーロッパから遠いためと世界恐慌の影響で参加国、選手が激減した大会。日本からは200名

の選手団が、前大会の種目に加えて水球、ホッケー、体操、芸術（1名）に参加した。三段跳びの南部忠平、馬術の西竹一が金メダルを獲得し、水泳でも清川正二らが5個の金を獲得した。

第11回 ベルリン（ドイツ）1936年：ヒトラーのオリンピックと言われ、国家の威信を賭けて開催された大会。史上初の聖火リレーが行われたほか、テレビ中継も試験的に行われた。日本からは251名の選手団が参加し、前大会の種目に加えてサッカー、バスケット、ヨットにもエントリーした。200m平泳ぎに出場した前畑秀子は日本女性初の金メダルを獲得した。この大会にも芸術という種目があり4名が参加し2個の銅メダルを獲得している。

第12回 ヘルシンキ（フィンランド）1940年：嘉納治五郎、杉村陽太郎などの努力でアジア初の開会が決定していた1940年東京オリンピックは、日中戦争の影響で日本が開催権を返上したため開催されなかった。開催権はヘルシンキに移ったが、第二次世界大戦の影響で中止となった。

第13回 ロンドン（イギリス）1944年：第二次世界大戦のため中止。

第14回 ロンドン（イギリス）1948年：第二次世界大戦による中止で12年ぶりの開催となったが、敗戦国である日本とドイツの参加は認められず、戦争中に政権交代したイタリアの参加は認められた。東側陣営の国々の不参加により東西の二極化の問題、イスラエル問題などが取り上げられた。

第15回 ヘルシンキ（フィンランド）1952年：中止となったヘルシンキで開催され、日本にとっては16年ぶりの参加となった。日本選手団は119名でレスリングの石井庄八が金メダルを獲得している。旧ソ連が大会初参加、スポーツによる代理戦争、二つの選手村（中国・朝鮮）などの問題が話題となった。

第16回 メルボルン（オーストラリア）1956年：夏季オリンピックが初めて南半球で行われた大会である。スエズ動乱によりエジプトなど

のアラブ諸国、ソ連のハンガリー進攻によるスペインなどの欧州諸国、中華民国の参加に抗議した中国など、ボイコットが相次いだ大会であった。このことから前回、5000名を越えた参加者が3178名までに減少した。水球のハンガリー対ソ連戦は乱闘騒ぎにまでなった。

第17回 ローマ（イタリア）1960年：ソ連が3回目の参加で、初めてアメリカを抜いて金メダル獲得数で首位に立った。アパルトヘイト政策を行う南アフリカがこの大会を最後に長期間参加が途絶える。自転車競技に参加したデンマークの選手が興奮剤を使用し死亡しドーピング問題が検討されている。マラソンのアベベ、ボクシングのモハメド・アリが金メダルを獲得している。

第18回 東京（日本）1964年：前回大会の立候補でローマに敗れた東京が開催したアジア初のオリンピック。開会式は10月10日で5133名が参加し、昭和天皇が開会宣言を行った。植民地支配から独立したアジアやアフリカ諸国が多く初出場を果たした。新興国競技大会問題で北朝鮮、インドネシアが不参加。中国を代表する国家の問題による中国の不参加などが問題となった。

第19回 メキシコシティ（メキシコ）1968年：海拔2240mに位置するメキシコシティで開催された大会。市民によるデモ、東西ドイツは別々に参加、北朝鮮の不参加などが問題となった。陸上競技200mのトミー・スミス、ジョン・カルロスが人種差別に抗議し、黒手袋を掲げて表彰台に上がり、金、銅のメダルを没収され永久追放となった。また、聖火リレーの最終ランナーに初めて女性が起用された。

第20回 ミュンヘン（旧西ドイツ）1972年：参加者が急激にふくらみ7170名となり、女性の出場者も初めて1000人を越えた。この大会ではオリンピック史上最悪の悲劇といわれるテロ事件が起こっている。会期中の9月5日、パレスチナゲリラが選手村のイスラエル選手宿舎を襲い、2名を殺害して9名の人質を取って立てこ

もった。救出は失敗し人質全員とゲリラ5名、警察官1名が死亡した。事件後、競技は再開された。

第21回 モントリオール（カナダ）1976年：前回大会を越える空前絶後の大会をとおりオリンピックの肥大化から、前大会には及ばないものの6028名が参加し、女性も1257名の参加となった。インフラの整備や開催費用で10億ドル以上の赤字となり、その後、何十年もの間、市民の税金から返済されたといわれる。これと同様に開催国の金メダルもゼロであり、22カ国のアフリカ諸国がボイコットした。

第22回 モスクワ（旧ソ連）1980年：開催国であるソ連のアフガニスタン侵攻に抗議し、アメリカ、日本、西ドイツ、韓国、中国など50カ国近くがボイコットした。また、フランス、イタリア、オランダなどの7カ国は開会式に参加しなかった。アパルトヘイト政策に絡んで大量のボイコット国を出していたアフリカ諸国の多くが復帰したものの参加国は僅かに81カ国であった。また、日本政府がアメリカの方針に従い大会ボイコットの方針を固めたが、その指示を受け入れざるを得なかったJOCが、基盤強化の必要性を痛感し1989年に日本体育協会から独立し法人化を図るきっかけとなった。

第23回 ロサンゼルス（アメリカ）1984年：オリンピックの肥大化、テロ問題などから開催都市の負担が大きくなり、ロサンゼルスは無投票で開催権を獲得した。組織委員長のピーター・ユベロスは「市民の税金は1セントも使わない」と言い切り、テレビ放映権の高額化、スポンサーの協賛金、入場料収入、記念グッズの販売を柱に4億ドル近い黒字を残し、アメリカの青少年基金に寄付された。これとは別に前回大会の報復とも取れるボイコットがあり、ソ連、東ドイツ、ブルガリアなどが参加しなかった。

この大会に著者は選手として参加したが、長年、しのぎを削ったライバルであるソ連、東ドイツの選手の姿がないのは寂しいものであった。

第24回 ソウル（韓国）1988年：アジアで開

催された2回目の大会。開催国である韓国独自の外交により久々に東西陣営が揃い159カ国が参加した。陸上100mでカナダのベン・ジョンソンが驚異的な世界記録で優勝するが、ドーピングが発覚し金メダルを剥奪される。

この大会から女子柔道が公開種目として参加が認められ、著者はコーチ兼女子柔道の解説として大会に参加した。日本女子は5名が出場し、金1、銀1、銅3の成績であった。オリンピックの優勝者が世界チャンピオンを兼ねるといえる時代を迎えたのもこの大会からである。

第25回 バルセロナ（スペイン）1992年：東西冷戦が終結し史上最大規模の大会となった。プロ選手が参加するオープン化が進み、男子バスケットボールでアメリカがジョーダン、ジョンソンを始めとするNBAの「ドリームチーム」を送り込んだ。この大会前に東西ドイツの統合、ソビエト連邦の崩壊などがあつた。

著者は女子柔道コーチ及びテレビ解説として大会に参加したが、初の正式種目となった女子柔道競技の抽選会が、地域紛争で個人参加となった旧ユーゴスラビア選手の到着が遅れたため、深夜となったことを記憶している。また、埼玉大学教育学部3年生の溝口紀子が決勝戦まで勝ち進み銀メダルを獲得した。

第26回 アトランタ（アメリカ）1996年：近代オリンピック100年を迎え、アメリカで4回目を数えた大会である。アテネ開催が有力であったが、メインスポンサーのひとつであるコカコーラの本社を有するアトランタ開催に商業主義との疑問の声もあがつた。オリンピックの拡大は止まらず、26競技、271種目、1万人を越える選手団が参加した。現状のままでは大国といわれる国家しか五輪を開催できない時代に入ったといえる。

著者は女子柔道競技の日本監督として参加し、日本女子柔道初の金メダルと銀2、銅1のメダルを獲得した。ロサンゼルス大会同様に大学のドミトリーが宿舎となったが、テロに対する警備は前回ほど厳しくなかった。

第27回 シドニー（オーストラリア）2000年：南半球で開催された2回目の大会。20世紀最後の大会は北京との決戦投票の結果、小差でシドニーに決まった。オリンピックの拡大化に歯止めをかけるため、大陸別予選制度の完全実施による少数精鋭化、メディア受けしない種目の再検討、採点競技（新体操・シンクロナイズトスイミング）、判定競技（ボクシング・レスリング）などの種目減が検討された。

著者はテレビ解説を担当しメディア村に宿泊していたが、柔道競技最終日の篠原、ドイエ（フランス）戦の誤審に憤りを覚えながら、柔道も種目減の対象とならない方策を考える必要があることを痛感した。

第28回 アテネ（ギリシャ）2004年：21世紀最初の大会は、第1回の開催地アテネに108年ぶりに戻った。新会長となったジャック・ロゲは、「28競技、301種目、選手数1万5千人は限界の数字」、「オリンピックをスリム化し経費削減を目指す」、「行われる地域が限られ、コストが高い割に観客動員数や視聴率の低い種目は、人気種目との入れ替えを検討する」と述べている。この対象となったのが、野球、ソフトボール、近代五種」である。

男子ハンマー投げで優勝したハンガリーのアヌシュが試合後のドーピングで失格となり、室伏広治が繰上げで金メダルとなった。この大会もテレビ解説として参加したが、宿舎も市中のホテルで警備は大幅に緩やかになったが、オリンピック値段による宿泊費の高騰（1泊7万円）は大きな問題である。

第29回 北京（中国）2008年：アジアで3回目のオリンピック。世界の204の国と地域から1万1千人以上の参加者が28競技、302種目に参加した。大気汚染や食品の安全の問題から開会ぎりぎりまで日本で調整を行った国が25カ国以上といわれる。チベット、ウイグル問題などもあり開会直前まで様々な議論のあった大会である。

また、アメリカのテレビ局の強い要望で、競

泳全種目、体操の団体総合・個人総合の決勝が午前中に行われた。著者は柔道女子強化部長として大会に参加したが、アフリカ、南米などの選手もメダルを獲得し、柔道の国際化が大きく進展しているを感じた。

### 3 嘉納治五郎師範とオリンピック運動

#### (1) 嘉納師範とIOC、日本体育協会

日本がオリンピックムーブメントに関わるようになったのは、およそ100年前のことである。それは嘉納治五郎師範（1860～1938年）が、1909年にクーベルタンの要請を受けてアジア初のIOC委員に就任してからである。

21世紀への期待を込めて、2000年1月に当時のIOC会長サマランチは、JOC（日本オリンピック委員会）会長職にあった八木祐四郎氏に、次のような書簡を送っている。「今世紀初頭、古代オリンピックの復興、IOCの創設に活躍されたピエール・ド・クーベルタン男爵が、オリンピックに日本の参加を呼びかけ、日本は1912年の第5回ストックホルム大会に初参加をしました。これを機に、日本のオリンピック・ムーブメントが本格的に始まりました。1909年、国境を越えて輝かしい活動をされていた嘉納治五郎氏をIOC委員に迎え入れました。嘉納氏は、その信念と情熱を持った活動により、オリンピックの普及と発展を担う力強い代弁者となりました。嘉納氏は1911年、日本における国内オリンピック委員会（NOC）を創設し、初の日本選手団を率いてストックホルム大会に参加しました。これ以後、IOCとJOCの文化と魂は、途絶えることなく交流を続けています。（以下略）」

前記の書簡にあるようにIOC委員に就任した嘉納師範は、1911年に日本体育協会を設立し、その初代会長に就任している。その経緯を文化功労者である諸橋徹次はその記念講演で恩師「嘉納治五郎を語る」として次のように述べている。



「何故先生がかくまでオリンピックに力をそそがれたか、それはオリンピックが国民体育の振興に至大の影響があり、他面国際親善に多くの貢献があるとの信念によるものと考えます。今日、オリンピックは一部の人々には、或いは多数の人々には競技の優劣だけが主なる目的のように見えます」と述べた後、日本体育協会の設立経緯について説明している。

「はじめにオリンピック参加の問題があった時、日本もそれに参加するための組織が必要だということで、先生は日本体育協会を創立し、その会長となったのであります。当時、競技が盛んであったためか協会の名を競技連盟としようという人々が多かったそうでありますが、先生はこれに対し断然反対された。『そんなものではない。体育は体育でやっていかねばならぬ。君たちが必ず競技連盟にしたいというなら、おれは脱退して別の体育協会を作る。そうしてオリンピックの一つの基礎団体としてみせる』といわれたそうであります」

「また或る時、柔道をオリンピックの種目に加えるかどうかという問題のあった時、先生は『加えるというなら別に反対はしない。併しこちらから願ってまで入る必要はない。柔道の世界連盟は自分の終世の念願だが、いずれはその時期も来るだろう。その時にはオリンピックもその中に入れてよい』とも言われたそうです。

このように諸橋の講演記録から嘉納師範は、明治後期の日本に必要なものが国民体育の振興と国際親善であり、競技力のみを追及する競技団体ではないことを洞察していた。また、当時の日本に必要なものが国民の体力向上と健康の推進であることから、オリンピック種目のみではなく、スポーツや運動を総括する団体を作る必要性を感じていたのであろう。オリンピック史のモスクワ大会の項でも述べたように、日本に体育とスポーツという概念が定着した1989年堤義明会長の手によってJOCは日本体育協会から独立する。日本体育協会は国民の体力と健康を分担し、JOCは国際競技力の向上を目指す

という図式は、師範が日本体育協会を設立して約70年後に実現した。体育とスポーツをともに日本に定着させるという師範の発想がなければ日本の体育振興はさらに遅れることとなったであろう。

## (2) 嘉納師範の教育観、体育・スポーツ観

嘉納治五郎師範の著書やその生涯に関する研究は枚挙に暇がない。しかし、その多くは柔道家としての嘉納師範にスポットライトを当てたものである。師範が、体育・スポーツをどのようにとらえ、発展させようと考えていたかを知るとは、師範が理想とする柔道と体育・スポーツの関係を解明することにもなる。以上のような観点から師範が取り組んだオリンピック運動について考察を進めてみた。また、師範より3年遅れて生まれ、1年早く逝去したピエール・ド・クーベルタン男爵とのスポーツ観の違いや活動の比較についても考察してみた。

師範は1860年、兵庫県の酒造、廻船問屋を生業とする豪商の家に生まれ、幼少の頃から四書五経を学んだ。1870(明治3)年、前年母を亡くしたことから、父に伴われて上京する。翌年から成達書塾に通い漢学、書道、洋学などを学ぶ。その2年後には育英義塾に入り外国人教師から英語、ドイツ語、普通学等を学んでいる。翌年の1874年には東京外国語学校入学、75年に開成学校(後の東京大学)入学、1877年に天神真楊流柔術を習い始める。

1881年に東京大学文学部政治学及理財学を卒業すると、さらに文学部哲学科で倫理学を1年間学んでいる。人間の内面の発達に興味を持ったからである。翌年の1882年に講道館を創立している。ここまでが少年期と学生時代の師範のプロフィールである。学生時代はベースボールでピッチャーを楽しむなど様々なスポーツも経験している。

これらの師範の経歴は、英語、ドイツ語、哲学などの西欧文化やスポーツを学びながら、日本の伝統的な武術である柔術をも学んでいった

ということになる。柔術を学び始めた頃の師範には、すでに体育、スポーツと我が国固有の文化である武道がどのように異なるか明確に区別されていたと考えられる。

次に教師時代の師範の考え方を探る。前述した諸橋は、師範の経歴や人柄、教育観、体育観などについても語っている。その中から高等師範学校校長時代の記述を抜粋してみる。

「先生の生涯の事業は柔道の創設普及、国民体育の振興作新、並びに教育の根本原理的確立にあったことは万人の認めるところであります。でありますから先生を語るとせばこの三方面に亘って論じなければなりません」

「先づ体育について述べますと、体育は教育の初めだ。体あたりして得た経験を基にすることが修養の第一歩だ。体育は国民全部のものでなければならぬというのが主眼であったように感じます」

「よく世間では知育、徳育、体育という言葉を用いるが、その順序には反対だ。価値でいうならば、徳育、体育、知育の順、教育の方法なら体育、徳育、知育の順とすべきだ、というのであります」

「先生の体育観は極めて明瞭で、体育自身が目的ではない。それによって人格を形成し、立派な国民を作る下地を作るにある。従って体育は国民全体の体育でなければならぬ。幾多ある運動の中でも柔道を除けば、水泳と徒歩などが一番よろしい。実行するにメンバーに制限があり、また場所によっては実行するのに多くの時間と経費を要するものは一般的に奨励しがたい」との考えでありましたと諸橋は述べている。この他にも長距離走、サッカー、テニスなどを学生に推奨するほど体育には熱心な教育者であった。

また、諸橋自身の意見として「本を読むとか人から聴くということもありますが、嘉納先生から教えられた通り、根本は本人の体験であり、本当の信念は体験から生まれる」とまとめている。さらに師範がこのような価値感を有

するに至った経緯として、学問について迷った時、勝海舟から「あなたはやはり学問というよりは実行をもってやりなさい。活学、生きた学問を」といわれたことを紹介している。

このような考え方は、オリンピックの創始者であるクーベルタン男爵（1863～1934年）の思想とよく似ている。男爵は地域紛争や国家間の戦争が頻発する19世紀後半に「古代オリンピックを近代スポーツの祭典に昇華させる」という誰もが思いつかなかったことを考え実現させた。

その思想は、「戦いに敗れた偉大な母国フランスを真に救うものは銃と剣ではない。真に必要なものは混迷するフランス教育界に活を入れることだ」と考え、「フランスでの学校教育が知育に偏し体育が全く軽んじられている点をあげ、情操の完全な発育のためには健全な肉体の発達が必要である」と指摘した。

また、「将来の真の自由貿易とは、わが国のあらゆるスポーツマンをあらゆる国に派遣し、それによって各国の名手の名技を取り入れることである。このスポーツの交流という自由貿易がヨーロッパに実現する日には、平和という神聖な目的は大きく前進するであろう」とも述べている。

### (3) 嘉納師範のオリンピック運動

嘉納師範のオリンピックムーブメントを年表としてまとめると以下ようになる。

- 1909年 国際オリンピック委員会委員。
- 1911年 日本体育協会創設会長に就任。
- 1912年 第5回ストックホルムオリンピック団長（日本初参加）。
- 1920年 第7回アントワープオリンピック参加。
- 1921年 第5回極東オリンピックにIOC委員として同行（上海）。
- 1932年 第10回ロサンゼルスオリンピック参加、ラッセル会長に東京市開催の正式な招請状を手渡し、東京への招致を説明。



- 1933年 IOC会議（6月ウィーン）に出席。  
嘉納推薦の杉村陽太郎が日本人3人目のIOC委員に就任。
- 1934年 IOC会議（11月ウィーン）に出席。  
東京開催の場合の組織、競技場、経費について説明。
- 1935年 IOC総会（オスロ）に杉村、副島委員が出席。
- 1936年 IOC総会（ベルリン）に嘉納が出席し投票。

このIOC総会の期間中に嘉納は現地で「もしも東京に決定しなかったなら、IOCが間違っているから、東京で別の国際大会を開催する」と述べている。IOC委員の多くは、渡航日数が長く、費用がかかりすぎるという理由で東京開催には反対の意向であった。しかし、嘉納は「より広く世界の人々が参加できるオリンピックにするために東洋でも行わなければならない。また、日本ほど熱心に参加している国は世界に少ないではないか」という理論を披露した。

- 1938年 IOC総会（カイロ）に出席し、1940年オリンピック大会を東京に誘致することに成功。

師範は、「IOC委員に就任して27年間のオリンピックムーブメントが実を結んだ。今後は東京大会を世界の模範とするべく、またこれを機にオリンピックを世界の文化にせねばならない」と喜びを語り、さらに「大会規模を競うようになっては弊害が生じるので、東京大会はベルリン大会より規模を小さくしたい」とインタビューに答えた。

大任を終えた師範は、米大陸周りバンクーバーより帰国の途中、肺炎のため5月4日太平洋上・日本郵船氷川丸船中にて永眠、6日横浜港に喪の帰朝となる。享年79歳。

嘉納師範は前年亡くなったクーベルタンの慰霊祭に参列した。同時代を生きた男爵が女性のスポーツ参加に消極的であったことに対して、師範は1915年に各地の女学校で柔道を実施、

1923年には講道館開運坂道場で女子部を始めるなど女性のスポーツ参加にも積極的であったことを追記しておきたい。

嘉納師範が逝去すると、その2ヵ月後に政府は、日中戦争の泥沼化により東京大会の返上を決定してしまう。戦後、再び日本は東京誘致にチャレンジすることとなる。1952年からはアメリカのアベリー・ブランデーが20年間IOC会長の座につく。彼は師範とも親しく、1940年の東京大会を最後まで支持した人物である。ブランデーは第二次大戦後も東京誘致を支持し、1959年に東京開催が決定すると国際柔道連盟のみならず欧州柔道連盟にも働きかけ柔道をオリンピック種目にするため尽力したといわれる。その後、柔道は1961年に東京大会で行われることとなった。

IOC委員を29年間務めた師範の人脈が、1964年の東京大会の実現と柔道のオリンピック種目への導入に大きく貢献したことは間違いない。ただ師範は柔道をオリンピック種目にするのではなく、オリンピック精神に武道精神を入れることを目指したのであろう。オリンピック精神と武道精神の融和を目指した師範の精神は現代柔道に生かされているであろうか。

#### 4 北京オリンピック柔道競技

柔道競技は開会式の翌日、8月9日から7日間、北京科学技術大学体育館において男女の軽量級から重量級への順に毎日、男女1階級ずつ競技が行われた。各階級に出場した選手の参加資格は以下の通りである。

##### (1) 階級・選手枠・出場資格

1996年アトランタ大会より大陸別予選制度が取り入れられ、今大会で4回目の大会となった。階級は男女とも7階級で男子は、60・66・73・81・90・100kg以下級と100kgを越えるクラスであり、女子は、48・52・57・63・70・78kg以下級と78kgを越えるクラスである。

選手の定数は男子217名、女子は147名で22名分の枠は性別を未定とし、総選手数は386名となる。これに加えてホスト都市のある国家に各級1名14名の枠が割り当てられる。

出場資格の最低条件は以下の通りである。

- 1) 国際柔道連盟 (IJFと略す) に加盟している連盟に所属していること。
- 2) 最低初段であること。(IJF規定による、条項23、1)
- 3) オリンピック前の4年間に、世界選手権もしくは大陸のシニア選手権に少なくとも1度の出場経験があること、または、2つの国際大会もしくはIJF主催のプレオリンピックトーナメント大会に出場経験があること。
- 4) 以上に記される出場資格選考制度により、NOC (国家オリンピック委員会) が獲得している出場枠を満たす選手が、各NOCによって選出される。

出場資格選考制度の詳細は表1の通りである。

## (2) アジア柔道ユニオン (JUA) 出場枠・ポイント制度

アジア代表として出場した選手の出場資格は以下の通りである。

- 1) 選手定数男子35名 (各級5名)、女子21名 (各級3名)、合計56名。各NOCにつき各階級1選手のみが参加できる。
- 2) 2008年アジア選手権大会において、各階級の勝者は1枠を獲得する。
- 3) JUAに割り振られた残りの枠は定められた大会において獲得したポイントの多い順の連盟・NOCに配分される (2007世界選手権において出場権を獲得済みの連盟、2008アジア選手権の勝者である連盟を除く)。
- 4) 2つ以上の連盟が同数のポイントを獲得し、オリンピック出場資格のための順位決定ができない場合、オリンピック出場決定試合を開催し、順位を最終確定する。
- 5) ポイント付与の対象は2006年から2008年に

表1 国際柔道連盟オリンピック枠

	男子		女子	階級	合計
1. 世界選手権	6	+	6	12 x 7	= 84
2. 大陸別					
アフリカ	3	+	2	5 x 7	= 35
アジア	5	+	3	8 x 7 (+2*)	= 58
ヨーロッパ	9	+	5	14 x 7	= 98
オセアニア	1	+	1	2 x 7	= 14
パン-アメリカ	6	+	3	9 x 7	= 63
各大陸への割り当て 合計	24	+	14	38 x 7	= 268
3. ホスト国	1	+	1	2x7	= 14
4. 三者委員会 招待枠 (IOC/ANOC/IJF)	性別及び階級未定				= 20
<b>TOTAL</b>					<b>= 386</b>

\* この2階級については、性別及び階級未定

開催される表2、表3の大会のみである。  
 6) ポイントはA、JUA、IJFとグループ分け  
 られた定められた大会において付与される。

7) Aの大会で1位入賞者に30ポイント付与が  
 基本となる。  
 8) ポイント獲得の記録申請はJUAのメンバ

表2 アジア柔道連盟ポイント制度(1)

年	2006	2007	2008
大会	アジア競技大会	アジア選手権大会	アジア選手権大会
1位	50	50	出場権獲得
2位	30	30	60
3位	20	20	40
5位	10	10	20
7位	5	5	10
9位	3	3	6
参加のみ	1	1	2

表3 アジア柔道連盟ポイント制度(2)

年	月	グループ	大会名	都市名	国名
2006	11月	A	青島国際柔道大会	青島	中国
	11月	A	韓国国際柔道大会	済州島	韓国
	12月	JUA	アジア競技大会	ドーハ	カタール
	12月	A	福岡国際女子柔道選手権大会	福岡	日本
2007	3月	A	カザフスタン国際柔道大会	アルマティ	カザフスタン
	5月	JUA	アジア選手権大会(シニア)	クウェート	クウェート
	8月	A	イラン国際柔道大会	テヘラン	イラン
	9月	IJF	世界選手権大会(シニア)	リオデジャ ネイロ	ブラジル
	11月	A	青島国際柔道大会	青島	中国
	11月	A	韓国国際柔道大会	ソウル	韓国
	12月	A	嘉納杯(男女)	東京	日本
2008	3月	A	カザフスタン国際柔道大会*	アルマティ	カザフスタン
	4月	JUA	アジア選手権大会(シニア)	済州島	韓国

\* 2008年カザフスタン国際柔道大会は中止もしくは変更となる可能性あり

	A	JUA	IJF
順位		A×3	A×4
1位	30	90	120
2位	15	45	60
3位	10	30	40
5位	5	15	20
7位	3	9	12
参加のみ	1	3	4

一である各連盟からJUAスポーツ・ディレクターに、その大会の公式記録のコピーと共に提供されなければならない。

9) 無差別の階級で出場した選手の獲得ポイントはカウントされない。

①ポイントは表に記される全ての順位に与えられる。どの順位にも達しなかった選手は、各グループで最小となる参加のみのポイントが与えられる。

②その大会が、IJFのダブル・リペチャージで敗者復活が行われる場合は、順位は7位までとなる。7位に達しなかった選手は参加のみと同じポイントが付与される。

10) 表に記された大会において、最低1回勝利していること。

以上の条件をクリアした選手と招待枠（ワールドカード）によって推薦された選手のみが、北京オリンピック柔道競技の出場権を得て本大会に参加した。ポイントを付与された大会と各大会のポイントは表2、表3の通りである。

### (3) 北京オリンピック柔道競技の結果

柔道競技は8月15日、男子100kg超級石井慧、女子は開催国トン・インの金メダルで幕を閉じた。日本柔道は金4、銀1、銅2の7個のメダルを獲得し、なんとか世界一の座を保った。2位は女子が金メダルを3個獲得した中国で、この2カ国以外に複数の金メダルを獲得した国はなかった。この他に金メダルを獲得した国は、韓国、アゼルバイジャン、ドイツ、グルジア、モンゴル、ルーマニア、イタリアで、特徴的なことは、これらの国の中で複数のメダルを獲得できたのは韓国のみであった。

柔道の強豪国フランス、キューバは多くのメダルを獲得したものの金の獲得はならなかった。また、開会式当日、南オセチア問題でグルジアを爆撃した強豪ロシアは大会に参加してから初のメダルゼロであった。メダルの獲得数を大陸別に見るとアジアが8カ国（23個）、ヨーロッパ11カ国（19個）、アメリカ大陸4カ国（11個）、

アフリカ2カ国（3個）でオセアニアのメダル獲得はならなかった。メダルを獲得した国の総数は25カ国であった。

今回の日本選手団の成績の評価を朝日新聞柴田昌宏記者は8月17日付の朝刊で次のように伝えている。

「男子のメダルは史上最低の2個。過去最低の4個を下回った。66キロ級の内柴と100キロ級の石井は優勝したが、ほかは惨敗。ベテランが多かったため幹部は選手の自主性に任せる方針を取ったが『日本代表なのに学生より練習しない』という声が聞こえてくるほど甘かった。風邪やけがを理由に代表合宿に参加しない選手さえいた。これでは強くならない。前回銀メダルだった泉が本番で減量に失敗したのは話にもならない。全日本柔道連盟の吉村強化委員長は『自主性の中でも厳しさが無いといけなかった』と振り返った。今回の代表で若手は60キロ級の平岡と石井だけ。新戦力に経験を積ませる場にもならなかった。次のロンドン五輪では初めて出場権を逃がす階級が出る可能性もある」と男子柔道を批評している。

ついで女子に関して「(前略) 女子は金2個を含む5階級でメダルを獲得した。前回の金5個は出来すぎだった面もあり、まずまずの結果だ。方針は明快だった。徹底した走り込みと寝技の練習だ。アップダウンのあるコースや砂浜をひたすら走らせた。ベテランも若手も関係なくしごいた。『世界一の練習をしている』と自認する48キロ級谷が『きついですね』とこぼすほどのハードワーク。試合で日本選手が先にバテる場面はほとんど見られなかった。寝技は、谷本や塚田が勝ち進んだ大きな要因となった。審判は寝技に入るまでの時間を長めに取る傾向にあり、その流れにも乗った。女子の顔ぶれもロンドン五輪では多くが入れ替わることになりそうだ。一からのスタートになる(後略)。」と述べている。

以上の総括に加えて強豪だったフランス、ブラジル、キューバが金メダルを獲得できず、ア

表4 国別メダル獲得数

国名	金	銀	銅	合計
日本	4	1	2	7
中国	3		1	4
韓国	1	2	1	4
アゼルバイジャン	1		1	2
ドイツ	1		1	2
グルジア	1			1
モンゴル	1			1
ルーマニア	1			1
イタリア	1			1
キューバ		3	3	6
フランス		2	2	4
オランダ		1	3	4
北朝鮮		1	2	3
ウズベキスタン		1	1	2
アルジェリア		1	1	2
オーストリア		1		1
カザフスタン		1		1
ブラジル			3	3
タジキスタン			1	1
ウクライナ			1	1
エジプト			1	1
スイス			1	1
アルゼンチン			1	1
アメリカ			1	1
スロベニア			1	1

ゼルバイジャン、モンゴルが初の金を獲得し、中央アジアが台頭してきたことを指摘している。各国のメダル獲得数は表4の通りである。

#### (4) 北京大会の総括と今後の強化策

北京大会日本柔道の総監督である吉村和郎強化委員長は『近代柔道』のインタビューに答え『状況に応じ安定した戦いができた女子、男子の敗因は、自主性の尊重し過ぎ』と題して、次のように述べている。

「私の予想では金メダル6個だった。谷、塚田の負けがなければ達成できたと思う。ただ男子は不甲斐なさ過ぎた、金メダル以外はほとんど初戦負けで、敗者復活戦でも負けた。ロンドンを目指して強化の仕方を抜本的に考えないといけない。ケガ人が多く、コーチもベテラン選手に対しては、『調整も選手任せにしておけばいいだろう』という思いがあったと思う。泉の減

量失敗は戦う以前の問題、鈴木は神経質になりすぎ、胸を張って前に出てから足技を効かすといういいときの柔道ができなかった」と述べ、「柔道は個人競技だけど団体競技と一緒に、チーム7人が一体にならないといけない」と男子について指摘している。

女子に関しては、「腰の悪い谷本は、けっして万全ではない体調に合わせた戦い方で決勝以外はきちっと寝技で抑え込んだ。それだけ冷静な目で戦っていた。上野は自分の間合いで戦っていたので、相手に投げられるという要素は全くなかった。中村も安定した戦いができており、塚田は悔いのない試合であったと思う」と述べた。

今後の日本柔道の方針は、「あくまでも一本を取る柔道を追及しなければいけない。小細工をするだけなら絶対に日本人が勝てない時代が来る。基本的な反復練習を徹底し、一人打ち込みなどで技術的な部分をもっと磨くべきで、腕の使い方がうまくなれば、さばくこともいやすこともできる」と語った。

さらに日本柔道の課題としては、「IJFランキング制度の導入によるポイント制度の検討、ポイントは個人に与えられるため選手の派遣方法、ポイントの高い選手を2人以上作ること、一定数のポイント試合出場による代表権の確保、グランプリシリーズ9大会の確認、マスターズ大会、世界選手権の準備と対策、代表最終選考である全日本選抜体重別大会の参加人数」などをあげ、「3人くらいを徹底的に鍛えたほうがいいのかもしれない。仮に3人くらいを鍛えるとするなら、その中の3番手は、その下の選手と入れ替えられるようにする。ただ、これとは見込んだ選手は、そう簡単には外さず、とことん使っていく」と今後の強化方針を示唆している。さらにコーチに対して「選手をきちんと怒れるコーチを作ることが必要だ」と語り、「大きな枠組みで言えば、実業団と学生をトップ集団と考え、それ以外の高校生や中学生のジュニアレベルの強化に力を入れようと考えている」と締

めくくっている。

大会終了後の8月27日、全日本柔道連盟において大会総括の強化委員会が行われた。大会を視察した各委員から提出された見解を女子部長として取りまとめた。女子柔道競技における主な評価は以下の通りであった。

「オリンピックで結果を残せる選手は、自分の柔道をやりきる、対応力がある、寝技ができる選手である」、「少ないチャンスをものにする、特に寝技のチャンスを逃さないこと」、「反則を取られた選手は結果を残せなかった」、「審判の傾向等の情報戦略も必要である」、「日本女子は地力がある。もっと好成績を残せたのではないか」、「追い込む時期に練習量が確保できた選手が勝った」、「1回戦で力を出し切れることがその後の試合を決める」などである。

次に今後のロンドンオリンピックに向けての課題は以下のようなものである。

「選手の選考方法、基準を明確にすること」、「怪我等による選手の交代の決断をどのようにするか」、「外国人独特の技術の研究やメンタル合宿などの開催」、「全日本担当コーチと所属コーチの連携と意思の統一への努力」、「若手選手へのスムーズな切り替えを如何に行うか」などである。

全日本強化部長を2年半務め、数々の海外、国内国際大会、全日本合宿に参加し、選手選考の任に当たり、今大会を終えた著者の知見は以下のようなものである。

- 1) 選手強化を実施するに当たって、全日本コーチの任務内容と所属コーチの業務の分担を明確にし、連携を取って強化を図ること。
- 2) 大会、国際合宿、国内合宿の選手の状況と課題を所属コーチに伝達し強化を図ること。
- 3) 研究課題、練習課題や練習メニューについては、所属と連携して問題意識を共有すること。
- 4) ランキング、ポイント制度を明確にし、大会参加への位置づけを明確にする。
- 5) 競技発展のため誰もが納得できる選手選考のあり方を構築する必要がある。

6) 今大会の成果は日蔭監督の人心掌握能力によるところが大きく、コーチ、選手が一丸となって戦えたことにある。

柔道競技のみではなく8月25日北京大会が閉幕した時点でのオリンピック全体の今後の課題は以下の通りである。

- 1) メディアやスポンサーの影響で競技開始時間を変更するケースが今回も見られた。
- 2) 国籍を変更して大会参加する選手や国籍変更をした選手が多数出場する種目があった。
- 3) ドーピング問題で大会後に失格を議論する種目が引き続きあった。
- 4) 日本代表選手で競技直前に欠場する選手が見られ、全日本、所属の選手管理の問題が取り上げられた。
- 5) メダルを獲得した選手のプロ化発言が多く見られたが、プロ選手が参加した種目の多くは不振であった。

#### (5) パラリンピック北京大会柔道競技

障害者スポーツの世界の祭典、第13回パラリンピック北京大会は、9月6日から17日の12日間、過去最大級の150近い国と地域から約4千人の選手が参加して熱戦が繰り広げられた。

本学柔道部では7年前より視覚障害者柔道選手の練習参加を受け入れており、前回アテネ大会では約3年間、埼玉大学の練習に参加した81kg級の加藤裕司、60kg級の広瀬誠が銀メダルを獲得した。視覚障害者の柔道選手を受け入れた理由は、障害者柔道の競技力が年々高まり、健常者の練習に参加する以外にメダルの獲得は困難になってきたということからである。アテネ大会が終わって諸外国の障害者スポーツはオリンピックと同様にプロ化が進み、練習環境も改善している。しかし、本学に参加し続けた2名の選手の練習環境は7年前と少しも変わらない。広瀬誠は盲学校教員として愛知県に赴任し、その後、熊本から平井孝明を受け入れ世界チャンピオンとなったが、平井も教員となり熊本に帰った。競技人口も増えず選手達が歳をとって



くだけである。このことより筆者は、今回のパラリンピック日本代表は苦戦を免れないであろうとの危惧を抱いていた。

柔道競技は男子6名、女子3名が参加して9月7日から3日間競技が行われた。しかし、メダルを獲得したのは4連覇を目指した66kg級の藤本聡の銀1個だけであった。7年間、柔道仲間として埼玉大学柔道部の練習に毎週土曜日参加し続けた全盲の柔道選手加藤裕司を指導してきた感想は、9月4日の朝日新聞に掲載された選手の意識調査そのものであった。その内容は以下の通りである。

- 1) 82.9%の選手が一番苦勞したのは費用の問題と答え、1年に平均約110万円はかかると答えた。
- 2) パラリンピック参加選手の42.8%が、練習場所がないと答えている。
- 3) 練習や大会で仕事に支障が出る(38.8%)。
- 4) 練習場所に通うのが大変(35.5%)。
- 5) 競技の時などに休みが取りにくい(31.6%)。

以上のように費用の捻出と仕事との両立が大きな悩みとなっている。この他に項目では「コーチ・指導者がいない」、「情報が得にくい」、「一般向けの施設が使えない」、「周囲の理解が得られない」などの基本的な練習環境の問題がほとんどである。

自由回答の中には「福祉としてではなくスポーツとしてとらえてほしい」、「五輪の競技の中で行ってほしい」、「多くの人に関心を持ってもらいたい」などがあげられ、福祉の一環としての活動では世界と戦うのに限界がきていることが明確となっている。

## 5 まとめ

オリンピックがクーベルタン男爵の手によって復興され112年の歳月が流れた。その精神は、「より速く、より遠く、より高く、より強く」というもので、スポーツの純粋な理念でもある。

第29回北京大会も「ひとつの夢、ひとつの世界」をスローガンに華やかに開幕し、8月24日に無事に幕を閉じた。

今回の研究では、近代オリンピックの歴史と問題点、嘉納治五郎師範のオリンピック運動、北京オリンピック柔道競技と今後の課題をテーマに調査を行った。本研究で得られた知見は以下の通りである。

1. 近代オリンピックは1896年に創設され9名の歴代IOC会長のもと、世界大戦における3回の中止を乗り越え平和の祭典としての重要な役割を果たしている。

2. 近代オリンピックの問題点は、開催資金の捻出、アマチュア規定、スポンサー制度、国家主義、東西の冷戦、地域紛争や国家間の紛争、人種差別、テロ問題、ドーピング、マスメディアの主導、商業主義、拡大化、選手のプロ化などであった。

3. アジア初のIOC委員であった嘉納治五郎師範は29年にわたってオリンピック運動を推進し、1940年オリンピックの東京誘致を成功させた。この大会は日本政府の返上により実現しなかったが、師範の国際的な活動と人脈は1964年東京大会開催に大きく貢献した。

4. 嘉納師範のオリンピック運動は、我が国における体育、スポーツ振興を目的としたばかりでなく、武道精神とオリンピック精神の融和を目的としたものであった。

5. 日本柔道の今後の課題は、嘉納精神の継承と一本を取る柔道である。そのためには間合いを取り、手首を柔らかく使った基礎練習と伝統的な練習方法の確立が必要である。

6. 日本女子柔道の今後の課題は、自分の柔道を出し切る能力の育成、さらなる寝技の強化、対応力(考える力)を身につけるなどであり、基礎体力では世界のトップレベルに位置していると考えられる。

7. パラリンピック日本代表選手の今後の課題は、活動費の捻出と活動場所、練習相手の確保などであり、大会参加や強化合宿に対する所

属の理解や有給休暇制度の検討などがあげられた。

8. オリンピックの今後の課題は、メディアやスポンサーによる競技への介入、国籍の変更、ドーピング、プロ化、拡大化などの問題である。

#### 参考文献

- 1) 大島淳『北京オリンピックテレビ観戦ガイド』, 昭文社, 2008
- 2) 桐生邦雄「北京五輪柔道競技」『近代柔道』30-9, ベースボール・マガジン, 2008
- 3) 桐生邦雄「総括!北京五輪」『近代柔道』30-10, ベースボール・マガジン, 2008
- 4) 真田久「オリンピック・ムーブメントと嘉納治五郎」『オリンピアン』2007 vol.3, 財団法人日

本オリンピック委員会, 2007

- 5) 橘倫明『北京オリンピック観戦ガイドブック 2008』, 昭文社, 2008
- 6) 友添秀則・近藤良享『スポーツ論理を問う』, 大修館書店, 2000
- 7) 野瀬清喜『柔道学のみかた』, 文化工房, 2008
- 8) 橋本一郎『柔道の歴史1 (生誕編)』, 本の友社, 1987
- 9) 東竜太郎『オリンピック』, わせだ書房, 1962
- 10) 諸橋徹次「嘉納治五郎を語る」『政治・経済・文化・学術』, 財団法人尾崎行雄記念財団, 1970

(2008年9月30日提出)

(2008年10月17日受理)